

横光利一「機械」論

―開示される非物語―

松 本 雅 之

論 文 要 旨

横光利一「機械」は昭和五年九月「改造」に掲載された短編小説である。段落分け、改行、句読点が少ない特徴的な文体は全編を通じて顕著であり、こうした点から「私」の意識のみが言語表現として現れていると認められる。

以上を踏まえ、「機械」は桂秀実「書く機械」（『探偵のクリティック―昭和文学の臨界』思潮社、昭63・7）以来構造的読解が中心になされてきた。そこで問題の中心となるのは「語る私」と「語られる私」との不一致であり、本文の表現に即して

言い換えれば、「私はもう私が分らなくなつて来た」との一文に至る経緯であろう。「機械」は何かについての物語を成立させていたのだろうか。より限定的に言えば、「私」についての物語足り得ていたのだろうか。そのように問うてみた時、あらゆる物語の挫折が「機械」の末尾には見て取れることがわかる。「機械」は物語として成立することが不可能である構造＝非物語に貫かれた小説なのである。

【キーワード】「機械」 文体 構造的読解 「私」 非物語

はじめに

横光利一「機械」は昭和五年九月「改造」に掲載された短編小説である。一文が長く、読点も段落分けも文章の長さには比して非常に少ないその文体は、そこに書かれた文字の意味を提示するまでもなく視覚的なインパクトを与えてくる。作中人物の発話に鉤括弧は付されていないし、ただひたすらに「私」の言葉が書き連ねられている小説なのである。本稿では、そのことを前提として「機械」につ

いての一つの思考を試みる。文体から出発した思考は「機械」を非物語として開示していくだろう。物語にはなり得ない言葉で書かれ、物語にはなり得ないにもかかわらず、限界に向かって言葉が書き連ねられていく。そうした事態が「機械」では起きているということが見えてくるはずである。

「機械」に特徴的な文体を見つけることはさほど困難なことではない。そうした文体を構成する表現を数え上げることにも「機械」研究のアプローチとして有効であるかもしれないが、ひとまず、「機械」の読解を構造的に突き詰め、本稿の思考もまた限界に向かってみることが肝要であろう。すなわち、徹底して「私」の言葉だけが読めるとはどういうことであるかを問うということである。こうして文体から始めて構造を経て非物語へと向かうという経路を見出すためにも、先行研究を概観し、研究史を作成してみよう。

一、先行研究史

「機械」研究のアプローチは多岐に亘り、ゲーム性に着目して論じるもの、語りの問題について論じるもの、他作品との関連から論じるもの、探偵小説との関連から論じるもの、映画性について論じるものなどがある。以下ではそれらを確認しながら「機械」研究史としてまとめていく。

研究史に先立って挙げねばならないのは小林秀雄による同時代評「横光利一」⁽¹⁾であろう。この評が「機械」に「世人の語彙にはない言葉で書かれた倫理書」、「本屋には売ってゐない作家心得」としての方向性を与えたのは、「機械」に関する重要事項の一つであり続けている。しかしながらこれらの有名なフレーズ自体が難解な評言のなかに埋め込まれており、後の評論や「機械」研究で引用されるにしても、多くの場合これらのフレーズ自体が高評価を意味するものであったことが指摘されるのみである。このことについて論じるには別稿を要するだろうが、とりわけ重要であるのは「倫理」の意味合いと、「心得」が「作家」のものであるという点であろう。この「倫理」について触れるに際して井上明芳論は、「私」に「他者肯定の指向性」があるという点を挙げる。⁽²⁾「倫理」について理解の基礎を打ち立てたこと、さらに「私」の「他者肯定の指向性」が示すところ、すなわち語るといふ営みが線条的である以上十全ではあり

得ないことを論じた点で重要な指摘であると考えられるが、本稿ではこの「他者肯定の指向性」について理解をさらに推し進めてみたい。他者を無条件に肯定すること、それは他者を本質的な点で他者たらしめないことでもある。他者とはわからないものだど割り切り了解したとき、そこに「機械」の文体が生成される。作中人物に「作家」のいない「機械」を、小林が「作家心得」と呼んだのはそのプロセスが問題となっていたからではなかったか。

すぐれて難解な小林の評から三か月後に発表された井上良雄「横光利一の転向」⁽³⁾にも触れておく必要がある。横光利一の言う「鬼」に「宿命」の語を付け加えて当時の横光の作品群を「宿命の鬼」との戦いとして読み解くこの評論は、「宿命の鬼」が寓意するものによって翻弄される人間がテーマであるという前提を研究史に提供している。主体性に欠け弱い人間が宿命あるいは運命に翻弄される物語としての読解は、「機械」に限らず横光の初期作品の研究にはしばしば見られるし一見説得力も十分にあるように思われる。しかしそれゆえに、こうした強固な作品読解のフレームを相対化する言説もまた同じだけの重要性を帯びてくる。

たとえば「宿命の鬼」との戦いがテーマであるとする読解の近傍には、「機械」の「ゲーム性」を重視するものがある。江後寛士「横光利一「機械」試論―心理のゲーム性について―」⁽⁴⁾は、それまでの「機械」評価が「作品そのもののことばによって実証」されていなしと指摘する。こうした問題設定の仕方自体は有効であるとは思われるが、江後論のいう「ゲーム性」もまた「作品そのもののことば」ではあるまい。とはいえ、「ゲーム性」については芹澤光興「『機械』の構図」、神谷忠孝「勝ち負けの構造―『機械』―」、宮口典之「『機械』論」⁽⁷⁾がその流れを汲んでいく。これらの論に共通するのはゲーム的な勝ち負けや、「宿命の鬼」との戦いを前提として「機械」を読解する点であり、一つの系譜を形成しているといつてよい。論点は勝ち負けの判定と主体性に欠ける「私」の意識がどのように解体されていくのかという点に絞られていく。

こうした論調に一石を投じているのが桂秀実「書く『機械』」⁽⁸⁾である。桂論は伊藤整の「機械」への言及に「オリエンタリズム的問題構成」を見て取っている。「横光にオリエンタリズム的問題構成を見出すことはさほど困難ではない」としながらも、こと「機械」に関しては「東洋対西洋という文脈が最も見出しにくい作品である」として構造的読解を行っている。

「機械」は確かに一人の話者「私」によって語られてきた。ところが、作品を読み終わったとき、われわれはその話者が痴呆化し、

その同一性がいつのまにか破壊されているのを知るのが、「私」は語り終わったが、その「私」がこれまでの物語を語り終えたはずがない……。これはいかにもノンセンスで幻想的な小説である。

「機械」はこのような意味で、語り、自体を崩壊に追い込んでいる、パラドキシカルな小説だと言える。それは、すでに子細に論じてきたところからも知られるように、語り（表象＝代行）の円滑なメカニズムを保証するものとしての自己意識を徹底的に酷使することによって、逆にその失調をもたらしてしまったのである。

結論はこうに、語りの崩壊の原因として自己意識の問題性を指摘し、「機械」がこの問題を内に含んでいる点で「昭和初期の文学的象徴」として位置付けられると述べている。重要であったのは、この語りの崩壊という事態に光を当てた点にほかならない。「機械」は「私」による一人称形式で語られており、作中人物たちの発話には鉤括弧が付されていない。言い換えれば、「機械」の中に「私」以外の言表主体が発する言葉を読むことは不可能なのであり、したがって、何が語られているかを問題とする意味はほほえないといつてよい。というのも何が語られているかとひとたび問うてみたとしても、その正当性を確かめる術がまったくないからである。ゲーム性や勝ち負けを問う論、「機械」に書かれた他者の存在を自明のものとしてそのままに信用する諸論もまた「私」の意識の崩壊を一つの論点としていたが、語られる「私」から語る「私」への連続性を暗に自明のものとする傾向があった。こうした先行論は、ここで一挙に相対化されたといつてよい。

これ以降、アプローチの仕方は特に多様化していく。たとえば沖野厚太郎「メタ小説・反探偵小説・「機械」⁽¹⁰⁾」では、小林秀雄の「倫理書」とする読みを批判的に受け継ぎ、メタ小説であることと反探偵小説であることの二点を指摘し、「機械」を「ステディック静態的な近代小説と全く反対の相貌を持つ、動態的な現代小説のテキスト」であると結論する。松村良「横光利一「機械」「寝園」——短編から長編へ⁽¹¹⁾」は桂論や井上良雄の評を踏まえつつ、「機械」の比較対象として「鳥」や「寝園」の構造にも言及し、「機械」を「関係意識の下僕」の物語」として捉えることで、「私の意識」の非自律性を指摘する。十重田裕一「「機械」の映画性⁽¹²⁾」は、これまでの「機械」研究では映画性をテーマに論じたものがなかったという理由から、表現方法やモチーフの中に映画性を指摘する数少ない論の一つである。島村健司「「機械」と探偵小説の近接性——「私」の企図と読者への通路⁽¹³⁾」は沖野論をはじめとする探偵小説との関連を論じた流れをくみ、

「機械」は同時代の文学形式における表現の基盤を探偵小説と同じくすると同時に、読者への視線という地点でも近接する側面を持つことを指摘し、探偵小説との近接性と「私」の役目に関して包括的に論じている点で示唆的な論考である。

研究史の重要な転換点の一つとなった桂論を批判的に引き継いだ語りの分析としては、松村良『「機械」——一人称の「私」⁽⁴⁾がある。後に触れるように「機械」における「話者の現在時」は判然としない。表面上は「単線的かつ継起的」だが、実際に読み終えてみると、この物語を「話者の現在時」において語り得たかという疑問が、必ずや生ずるはずである。このことについて桂は、結末において一人の話者「私」の同一性が「破壊」されたのだと説明するが、そうではなく、『私』の帰結が作品冒頭の『私』とは接続しえないものとして、あらかじめ設定されているからではないか。これは一人称の「私」における、時間的ばかりでない、空間的な「物語言説と物語内容のずれ」、言い換えるなら、「語る私」と「語られる私」とが時間的・空間的に切断されていること（を）意識的に顕在化しようとしたテキストであること）によるものと思われる。

このように松村論は虚構テキストにおける「私」の問題を整理し、「近づいて来る機械の鋭い先矢」とは、〈語られる私〉に隠された殺意を暴いてしまう「私Ⅱ×」の語りの隠喩としか考えられないはずだ」として、「機械」に主題化されている「語る／語られる一人称の「私」について論じている。同じく語りの問題に言及した井上明芳「横光利一「機械」論——語ることの原理⁽⁵⁾」は物語が局面的に生成される様態に注目することで信用の構造を見出している。とりわけ重要であるのは、語ることが他者抹消の軌跡にもなり得てしまうことから「語ることに原理的に潜在する苦痛」が書き込まれていることを論証している点であろう。「私」はただ当たり前に存在し、当たり前前に語っただけ」であるとして「機械」の語りを原理的な様態として捉えている。

さらに「一人称複数形」の問題を詳述するとともに松村論、および井上明芳論と同様に「私」の分析を行った島村健司「一人称複数形のレトリック——横光利一の「機械」は、なぜ「私」語りなのか⁽⁶⁾」は、「私」語りの必然性について次のようにまとめている。

私小説のなかの「私」が指示するものは作者自身として限定されてくる。しかし、「機械」の「私」は、「私」と記されていることにおいて、「私」たる命脈を保っており、私小説のように物語世界の外側に存在する特定した個人に還元されることはない。この点で「機械」の「私」に対して指示されるものは限定され得ない。「私」が生成されてくるもうひとつの背景としてあげた、モダ

ン都市とのあいだで生み出される「私」という物語もまた、この「私」に指示されるものは限定されない。ここでとらえられた都市なるものと接することによって生じる「私」は、個々が抱える「私」の象徴である。

以上、年代順に「機械」研究を概観してきた。ここに挙げた研究史を概観すると、初期はゲーム性に着目した論、「勝ち負け」に着目した論が多く見受けられる。しかし絛論を皮切りに、構造的読解、すなわち語る「私」を重点的に分析する傾向が顕著になったといえるだろう。さらにそれに伴ってアプローチの仕方も多様化しているように思われる。

ここに挙げ切れていないほど多岐にわたる研究がなされてきた「機械」であるが、いまだ構造的読解の余地は残されている。ポイントとは、「機械」を非物語として開示してみることにある。そのためには多くの「機械」研究が言及してきた「私」語りであること、「私」以外の言葉が見出せないこと、一文が長く、読点や段落分けなどの分節が少ないこと、こうした基本的な事項から確認し直し、語り得ないことについて語ろうとする言葉で「機械」が書かれていることを確認していく必要がある。

二、語りに内在する他者性

いかなる読書行為も、意味を成す方向に、記された文字を読み進めることで進行する。この前提に立ち返った時、「機械」のこの文体に意味を見出すことができる。

此処の分家としてやがては一人でネームプレート製造所を起さうと思つてゐるだけに自分よりさきに主人の考案した赤色プレート製法の秘密を私に奪はれて了ふことは本望ではないにちがひない。しかし、私にしてみればただ此の仕事覚え込んでおくだけでそれで生涯の活計を立てようなどとは謀んでゐるのでは決してないのだが、そんなことを云つたつて軽部には分るものでもなし、また私が此の仕事覚え込んで了つたならあるいはひよつこりそれで生計を立てていかぬとも限らぬし、いずれにしても軽部なんか何を思はうとただ彼をいらいさせてみるのも彼に人間修養をさせてやるだけだとぐらゐに思つてをればそれで良ろしい、さう思つた私はまるで軽部を眼中におかずにあると、その間に彼の私に対する敵意は急速な調子で進んでゐて、此の馬鹿がと思つて

ゐたのも実は馬鹿なればこそこれは案外馬鹿にはならぬと思はしめるやうにまでなつて来た。

この引用部を見ればわかる通り、一文目に比べて二文目の長さは大変際立っている。むしろ「機械」に書かれたすべての文が長いわけではないが、一文が全体的に長く、句読点や段落分けなどの分節が少ないことは「機械」の特徴のひとつである。段落は全部で八段落、作中人物の発話には鉤括弧が用いられないため、その分改行も行われぬ。どのような文章であろうと、我々は白い紙の上に黒いインクで記された文字を縦に一行ずつ左へ、意味を成す方向へと読み進めていく。それはそこに文字があるからである。通常、句読点や改行、鉤括弧は意味の分節であつて、この分節の記号がなければ当然続けて読むことになる。とするならば、「機械」もまた、いかなる意味を表していようと、いかなる分節がふさわしく思われようと、続けて読まざるを得ない語り方がなされているという前提から自由になることはできないだろう。「機械」に書かれてはいない論理や語彙を携えていようと、「初めの間は」と始まり「私の知つてゐよう筈がないのだから」と読み終わる読者が必ず押し進められることになるのは、文字を当たり前に読み進めて行くというこの運動にほかならない。「機械」の文体ではこの運動が特に際立っているのである。先の引用部であればネームプレート製造所の仕事で「生涯の活計を立てようなどとは謀んでゐ」ないこと、それを軽部が分かるものではないこと、実際にネームプレート製造所の仕事で生計を立てていくかもしれないこと、軽部を眼中に置かずにいること、しかし軽部の敵意が案外馬鹿にはならないことなど、複数のトピックスが一文に含まれ、一息に語られている。続けて読まざるを得なくなるこの事態は、語りの推進力が強いとでもいえようか。島村健司「二人称複数形のレトリック―横光利一の「機械」は、なぜ「私」語りなのか⁽¹⁷⁾」が、「機械」が「私」語りである必然性について「読者が参入する契機」であると結論したように、ここにも読者の参入を見て取るができるだろうし、島村健司「機械」と探偵小説の近接性―「私」の企図と読者への通路⁽¹⁸⁾」で言及されていた「読者に最後まで読ませる要素」として、この推進力を挙げてもよいかもしれない。

分節が少ないことに加えて、「機械」の文体の特徴として顕著なのは論理的であることだろう。これは探偵小説との関連で読まれてきた理由のひとつでもあり、先行論でも言及されてきてはいる。引き続き先の引用を読んでみよう。

ここで「私」は「一人でネームプレート製造所を起さうと思つてゐる」軽部の「本望」について想像し、「ちがひない」と締めくくつ

ている。一方で「私」の考えは「軽部には分かるものでもな」としながらも、必ずしも考え通りの人生を送るとは限らないということも考慮のうちに入れている。そして「いづれにしても」という思考を推し進めるフリーズが、これらの可能性を保存したまま次の言説を生成しているのだ。いくつかの可能性を取り落とすことなく進行すること、ここに可能性を点検し続ける語りの厳密さを見て取ることが出来るだろう。推理をしているかのような論理的な様相でありながら、それでいて、厳密さゆえに結論が出なくとも先へと進行していく。以上の二点を「機械」文体の特徴として挙げておこう。

こうした文体から浮き彫りになるのは語りに内在している他者性^⑩である。

人間は敵でもないのに人から敵だと思はれることはその期間相手を馬鹿にしてゐられるだけ何となく楽しみなものであるが、その楽しみが実はこちらの空隙になつてゐることにはなかなか気附かぬもので私が何の気もなく椅子を動かしたり断裁機を廻したりしかけると不意に金槌が頭の上から落つて来たり、地金の真鍮板が積み重つたまま足もとへ崩れて来たり安全なニスとエーテルの混合液のザボンがいつの間にか危険な重クロムサンの酸液と入れ換えられてゐたりしてゐるのが初めの間はこちらの過失だとばかり思つてゐたのにそれが尽く軽部の為業だと氣附いた時には考へれば考へるほどこれは油断をしていると生命まで狙はれてゐるのではないかと思はれて来てひやりとさせられるやうにまでなつて来た。(中略)私は御飯を食べる時でもそれから当分の間は黄色な物が眼につくとそれが重クロムサンではないかと思はれて箸がその方へ動かなかつたが、私のそんな警戒心も暫くすると自分ながらに滑稽になつて来てさう手容く殺されるものなら殺されてもみようと思ふやうにもなり自然に軽部の事などは又私の頭から去つていった。

「不意に金槌が」落ちてくる、「地金の真鍮板が積み重つたまま足もとへ崩れて来」る、安全な混合液が危険な液体と入れ替えられてゐることなど、ここで挙げられる様々な危険は「不意に」、「いつの間にか」とある通り「私」の予想を越えて到来している。むしろ、予想を超えて到来するがゆえに危険なこととして認識されているといつてもよいだろう。予想というのは常に不完全であり得る限りで予想なのであり、完全な予想とはそれが未来の先取りでなければ自家撞着にほかならない。むろん、これが軽部の仕業だと気づいたということは安心の材料にはならないだろう。「私」が「考へれば考へるほど」「ひやりとさせられるやうに」なつてゐることからも明ら

かである。こうして予想を超えた他者の振る舞いが語られることは「私」の思考を促していく。ここに、他者性が語りに内在していることを指摘できよう。語る行為は、知り得た出来事、知り得た対象をただ言葉に変換していく営みなのではなく、語りの進行と共に「私」に内在する他者性となんらかの折り合いをつけて行く、あるいは、つけざるを得なくなっていくことなのである。引用部を見れば、ここでの折り合いは「そう手容く殺されるものなら殺されてもみよう」という考えでつけられていることがわかる。まさにこのあと「軽部の事」が「私の頭から去」っているからである。

しかしこれが根本的な問題の解決になっていないことはいままでもないだろう。つまり、「私」の語りがこの問題から逸れ、進行したに過ぎない。このように見えて来ると、「そう手容く殺されるものなら殺されてもみよう」とは、先の「いづれにしても」と同様に、ある種の決着、あるいは結論を遅延させている言説であることがわかる。

ここまで「機械」の文体の特徴と、語りに内在する他者性について論じてきた。以上から言えるのは、語るという行為が、より限定していえばその進行が、文体や他者性に支えられているということである。他者性を巡って「私」が思考し、結論の遅延が語りを前に進めて行くのであれば、「他者肯定の指向性」²⁰について本文に即して確認しておく必要がある。

三、他者を肯定すること

ネームプレート製造所の主人についての語りは、徹底して分からなさに晒されている。主人について冒頭では「狂人」として語られ、さらにはネームプレート製造所の賃金を落としてしまうことに關してはそのプロセスや理由が「誰にも分からない」こととして語られる。前章までの他者性の議論に照らせば、この主人についての語りもまた注目に値することがわかるだろう。

「誰にも分からない」以上、主人については「私」が思考したとしても答えに辿り着くことがなく、語りを進めるためには思考を続けるか、あるいは「いづれにしても」、「とにかく」と結論を遅延させる仕方で語らざるを得ない。そんな誰にも分からない主人の振る舞いは、「仙人」のそれとも比肩される。

さてその日主人と私は地金を買いにいつて戻つて来るとその途中主人は私に今日はかう云ふ話があつたと云つて云うには自分の家の赤色プレートの製法を五万円で売ってくれと云ふのだが売つて良いものかどうかと訊くので、私もそれには答へられずに黙つてゐると赤色プレートもいつまでも誰れにも考案されないものならともかくもう仲間達が必死にこつそり研究してゐるので製法を売るなら今の中だと云ふ。それもさうだらうと思つても主人の長い苦心の結果の研究を私がとやかく云ふ権利もなしさうかと云つて主人ひとりに任しておいては主人はいつの間にか細君の云ふままになりさうだし、細君と云ふものはまた目さきのことだけより考へないに決まつてゐるのを思ふと私もどうかして主人のためになるやうにとそればかりがそれからの不思議に私の興味の中心になつて来た。

ここに引用したのは、主人が地金を買いにいく際「私」が金銭の番をするよう主婦に言いつけられた帰り道について語られている箇所である。ここで「赤色プレートもいつまでも誰れにも考案されないものならともかくもう仲間達が必死にこつそり研究してゐるので製法を売るなら今の中だ」と主人が述べたであろう言葉はあくまで「私」の言葉として語られているのであり、それゆえに主人の発言に鉤括弧は用いられない。そして「それもさうだらう」と主人の論理は肯定されている。このことはこう言い換えられないであらうか。つまり、このように肯定される「赤色プレートもいつまでも誰れにも考案されないものならともかくもう仲間達が必死にこつそり研究してゐるので製法を売るなら今の中だ」との言葉は「私」の語り得る言葉でありながら、主人の言葉による触発なくしては語られ得なかつた言葉である、と。こうして触発された言葉を語るといふことは、「それもさうだらう」との了解とは異なる位相で他者を肯定することなのである。「機械」の言説は、他者に促される形で生成していく。だからといって、たとえば「赤色プレートもいつまでも誰れにも考案されないものならともかくもう仲間達が必死にこつそり研究してゐるので製法を売るなら今の中だ」との言葉をそのまま主人の言葉であると思ふことはできない。繰り返すようだが、「機械」には「私」の言葉以外を見出すことができないからだ。しかしむろん、「私」の言葉でしかないと言ひ切ることもまた不可能だらう。したがつてこの「機械」の本文から言えることは、「私」が主人の言葉を引用していると推測し得る仕方では語られている文があるといったところだろうか、このように複雑な言い回しにならざるを得ないのである。こうした言説が成立する限り、「機械」の語りは単に鉤括弧が用いられないというより、鉤括弧がふさわしくない語り

方がなされているといえそうである。

ここで「それもさうだらう」と他者を疑うことなく肯定することは、翻って、全く取り合わない素振りと本質的に同じのものではなかったか。取り合わないことは拘らないこと、思考を先へと進めることもある。このように換言すれば、他者を肯定することが前章で述べてきた結論の遅延とも同様の事態であることが見えてこよう。これが「倫理」であるのは他者に変わることを求めず、期待せず、そのままにするからにはかならない。他者を無条件に受け入れ、他者とはわかり得ないものであると割り切る以上、あらゆる他者への期待、希望が絶たれているといってもよいだろう。小林秀雄「横光利一」⁽²¹⁾が「機械」に「倫理」を見出し井上明芳論が「他者肯定の指向性」を見出していくことになるのは、「私」の言葉が絶望へと通じている証でもある。

この絶望は、哲学的な意味合いで私の死について語ろうとすることと同様の構造を「機械」が有していることを示している。私は私の死を語ることはできない。私が死の経験をするれば語ることができなくなり、語るとすれば死の経験を経ないといえるからだ。私の死についての言葉は、常に他者の死に基づいて綴られている。私の死について語ろうとすれば、物語の不可能性が最も端的に開示されるだろう。それは、当面はわからないことについてひとまず語るといふ程度の不可能性ではない。語る主体が、あるいは対象が決定的に欠けているという事態をそのままに想定すればよい。「機械」もまた、そうした言説の一つなのである。

四、非物語としての「機械」

物語の不可能性、すなわち非物語としての様相は「機械」全編を通して随所に見られる。ここからはとりわけ重要であると思われる箇所をいくつか確認しておこう。

すると五日目頃の夜中になつてふと私が眼を醒ますとまだ夜業を続けてゐた筈の屋敷が暗室から出て来て主婦の部屋の方へ這入つていった。今頃主婦の部屋へ何の用があるのであらうと思つてゐるうちに惜しいことにはもう私は仕事の疲れで眠つて了つた。翌朝また眼を醒すと私に浮んで来た第一のことは昨夜の屋敷の様子であつた。しかし、困つたことには考へてゐるうちにそれは私の

夢であつたのか現実であつたのか全く分らなくなつて来たことだ。疲れてゐるときには今までとてもときどき私にはそんなことがあつたのでは此の度の屋敷のことも私の夢かもしれないと思へるのだ。しかし、屋敷が暗室へ這入つた理由は想像出来なくはないが主婦の部屋へ這入つていつた彼の理由は私には分らない。

「ある市役所」からネームプレート製造の大きな注文が入つたことで、主人の友人が営む製造所から屋敷という職人が手助けに来ることになり、そこから「五日目頃の夜」の出来事として語られている箇所である。「主婦の部屋」へと入つて行く屋敷を目撃したことが語られているが、続けて「考へてゐるうちにそれは私の夢であつたのか全く分らなくなつて来」るとも語られている。ここでは考えること、思考することが、「私」の確信や見たことに対して疑いを生んでしまつている。重要であるのは、「私」が「私」の語りを疑つているという点であろう。一文目で「屋敷が」「主婦の部屋の方へ這入つていつた」と語られたことは「私」の夢であつた可能性によつて揺さぶられ、語り直されていく。ここに自己言及的な性格を見て取ることができる。語つたことは語り直され意味として定着することがない。「機械」全編に渡つて見られる「なつて来た」とはそうした変化を如実に表している文末表現であるといえよう。さらに今にして思えば、はじめ「狂人」として語られていた主人公が「仙人」と語り直されたのもそうした語りの指向性ゆゑであつたのだろう。「私」が「私」の語りを疑うことで、常に新しくあること、意味が定着しないこと、いま物語になりつつあるものの物語になる可能性は絶たれてゐること。非物語はそうした過程としてのみ現れてくる。なお、気をつけねばならないのは、これは読みの自由が確保されているという事態とは根本的に異なることである。たとえば先の引用で屋敷がネームプレート製造所にやつてきて「五日目頃の夜」、主婦の部屋へと入つて行つた人影は屋敷のものにほかならず、それは夢ではなかったのだと結論めいたことを言つてみることはできる。が、その正当性を保証するものは「機械」のどこにも書かれていないことを忘れるわけにはいかない。こうして「正当性」に言及してみたとき、「機械」の本文にも「正当」の二文字が見られることに気づく。

私はしまひに黙つて他人の苦痛を傍で見てゐると云ふ自身の行為が正当なものであるのかどうかと疑ひ出したが、そのじつとしてゐる私の位置から少しでも動いてどちらかへ私が負担をすればなほ私の正当さはなくなるやうにも思はれるのだ。

さらに屋敷と軽部と「私」との乱闘について語られたのち、次のように語られてゐる。

なるほどさう云はれば輕部に火を点けたのは私だと思はれたつて弁解の仕様もないのでこれはひよつとすると屋敷が私を殴つたのも私と輕部が共謀したからだと思つたのではなからうかとも思はれ出し、いつたい本当はどちらがそんな風に私を思つてゐるのかますます私には分らなくなり出した。しかし事實がそんなに不明瞭な中で屋敷も輕部も二人ながらそれぞれ私を疑つてゐると云ふことだけは明瞭なのだ。だが此の私ひとりにとつて明瞭なこともどこまでが現實として明瞭なことなのかどこでどうして計ることが出来るのであらう。それにも拘らず私たちの間には一切が明瞭に分つてゐるのかのごとき見えざる機械が絶えず私たちを計つてゐてその計つたままにまた私たちを押し進めてくれてゐるのである。

「私」が「私」の「正当さ」を問ひ、「私ひとりにとつて明瞭なこともどこまでが現實として明瞭なことなのかどこでどうして計ることが出来るのか」と絶えず疑ひ続けていることはいまや明らかであらう。「私」は「私」が何をどのように語つてゐるのか、どのような「正当さ」に則つてゐるのかを問題にし続ける。こうした言葉は事實の報告をしてゐるわけではないし、「私」の心理を表現してゐると捉えることも難しくなつてくるであらう。「私」という人間の存在が先立つて在り、「私」と言いながら語る以上そこに語られてゐるのは「私」の心理なのだという素朴な信念が、「機械」では成り立たなくなつてくる。問題となるのは常に「機械」本文の成立の仕方であつて、それ以外ではないのである。本文成立の仕方が問題となる、これがまさに「機械」を「作家心得⁽²³⁾」と言ひ表し得るゆえんであらう。これほどまでに自己言及的で、それまで語つてきたことを疑うというのはその場で訂正していく言い直しというより考えを改めていく書き直しに近い當為であるといつてよい。これまで「私」を語りと呼称してきた本稿にあつては、その発話的なイメージを喚起せざるを得ない〈語る〉という行為から、どちらかといえば〈書く〉という行為へと目を向けた方がよいのかもしれない。しかし文学研究で慣習的に用いられる〈語る〉という語彙には既に発話的な意味合いも書字的な意味合いも含まれてしまつてゐるであらう。ここでのその差異について論じることはいないが、「機械」の語りが多分に〈書く〉いてゐるかのような成立の仕方をしていると指摘しておくことはできるであらう。

「機械」が過程としてのみ現れてくる非物語として常に新しい仕方で開示され意味が定着しないとすれば、どのように終わり得るのか。全編を通して過程だとすると、それは終わり得ない小説となつてしまふ。そもそも、始まり、終わるがゆえにその間が過程となるので

はないか。「機械」もやはり、確かに結末を持つひとつの小説にほかならない。屋敷の死について語られる箇所から最終部にかけて読解してみよう。

屋敷と軽部と「私」、三人の乱闘の次の日に、「誰もが全く予想しなかった新しい出来事に逢はねばならなかった」と語られているのは「主人が私たちの仕上げた製作品とひき換えに受け取つて来た金額全部を帰りの途に落してしまったこと」である。この主人が賃金を落としてしまったという事態が「私」にとって他者としての振る舞いであつたことはもはや確認するまでもないだろう。その顛末と思考は語られているが、またしても答えが出ないままに話題は先へと進んでいる。今度は「酒でも飲むより仕方ない」との割り切り方である。そしてこの酒を飲むということが原因で、屋敷が死んでしまう。重要なのはこの死の真相を巡る語りである。やや長い引用となるが、この最終段落こそ分節しないことに意味があることがよくわかるはずである。

その夜私たち三人は仕事場でそのまま車座になつて十二時過ぎまで飲み続けたのだが、眼が醒めると三人の中の屋敷が重クロム酸アンモニアの残つた溶液を水と間違へて土瓶の口から飲んで死んでゐたのである。私は彼を此の家へ送つた製作所の者達が云ふやうに軽部が屋敷を殺したのだとは今でも思はない。勿論私が屋敷の飲んだ重クロム酸アンモニアを使用するべきグリユー引きの部分にその日も働いてゐたとは云へ、彼に酒を飲ましたのが私でない以上は私よりも一応軽部の方がより多く疑はれるのは当然であるが、それにしても軽部が故意に酒を飲ましてまで屋敷を殺さうなどと深い謀みの起らうほど前から私たちは酒を飲みたくなくてゐたのではないのである。酒を飲みたくなつたときより私が重クロム酸アンモニアを造つておいた時間の方が前なのだから疑ひ得られるとすると私なのにも拘らず、それが軽部が疑はれたと云ふのも軽部の先づひと目で誰からも暴力を好むことを見破られる逞しい相貌から来てゐるのであらう。しかし、私とても勿論軽部が全然屋敷を殺したのではないと断言するのではない。私の知り得られる程度のことは彼が屋敷を殺したのではないと云ひ得られるほどのことであるより仕方がないのだ。もともと軽部は屋敷が暗室へ忍び込んだのを見てゐるからは、彼を殺害する以外に彼に秘密を知られぬ方法はないと一度は私のやうに思つたであらうから。さうして私が屋敷を殺害するのなら酒を飲ましておいてその上重クロム酸アンモニアを飲ますより仕方がないと思つたことさへあることから考へても、彼もそのやうに一度は思つたにちがひないであらうから。だが、酒に酔つてゐたのは私と屋敷だけでは

なくて軽部と同様に酔つてゐたのだから彼がその劇薬を屋敷に飲まさうなどとしたのではないであらう。よしとへ日頃考えてゐたことが無意識に酔の中に働いて彼が屋敷に重クロム酸アンモニアを飲ましたのだとするならそれなら或いは屋敷にそれを飲ましたのは同様な理由によつて私かもしれないのだ。いや、全く私とて彼を殺さなかつたとどうして断言することが出来るであらう。軽部より誰よりもいつも一番屋敷を恐れたものは私ではなかつたか。日夜彼のゐる限り彼の暗室へ忍び込むのを一番注意して眺めてゐたのは私ではなかつたか。いやそれより私の発見しつゝある蒼鉛と珪酸ジルコニウムの化合物に関する方程式を盗まれたと思ひ込みいつも一番激しく彼を怨んでゐたのは私ではなかつたか。さうだ。もしかすると屋敷を殺害したのは私かもしれないのだ。

屋敷の死は重クロム酸アンモニアを飲んだことに因る。真つ先に疑われているのは軽部であるが、しかし「私」は軽部が犯人であると安直に結論付けることはない。「私が屋敷の飲んだ重クロム酸アンモニアを使用するべきグリユー引きの部分にその日も働いてゐた」ことを挙げながらあくまでも「私」と軽部との疑われる程度を評価し、死のきつかけとなつた酒を飲むという行為を思い立つたタイミングに疑問を投げかける。そこから軽部が疑われた理由について、つまりその逞しい相貌が疑われた理由であろうことを推測し、なぜか軽部が屋敷を殺したと「断言するのではない」という留保を付け加えている。この「断言するのではない」ということについては次の一文で「彼が屋敷を殺したのではないと云ひ得られるほどのことであるより仕方がない」と言い換えられている。「云ひ得られるほどのこと」、「つまり言うことくらいはできるといふことであらう。さらにここから二文、軽部が屋敷を殺害してもおかしくない理由が、軽部の思考を推測する形で語られる。しかしこれもまた「だが」と逆接で受けて、軽部もまた酔つていたことが屋敷殺害を遂行できなかったであらう理由として挙げられている。加えてこの理由すらもまた「無意識」の働きゆえに確かではない可能性が考慮され、疑いの矛先は同様の理由で「私」へと至つて行く……。思考が結論に至らない様を表すには、分節を極端に少なくすることが有効であることがよくわかる段落になっている。おそらく、同じく言葉を用いて「機械」について思考している本稿もまた、本来であれば思考の続く限りは分節を挟まないでおくべきなのであらう。

非物語としてその特徴をいまひとつ挙げておくとすれば、物語として捉えられるテキストとは異なつて語られた内容のあらすじを作成できないということがある。ちょうどこの引用部のあらすじを強引に作成しようものなら、「逞しい相貌から来てゐるのであらう」、「断

言するのではない」「思つたであらうから」「ちがひないであらうから」「飲まさうなどとしたのではないであらう」「よしとへゝ飲ましたのだとするならそれなら或いは私かもしれないのだ」「いや、ゝ断言することが出来るであらう」「私ではなかつたか」「私かもしれないのだ」という推測や疑いの文言がこの語りの多くを占めているということが取り落とされざるを得ない。より正確に言えば、断定的な言いきりの形に変形されてしまふだろう。あるいは同語反復的に本文を繰り返すか、内容ではなく語りについて記述するほかはなく、それはもはやあらずじとは言えなくなつてしまふ。あらずじを作成できない、こう言つてよければ要約に適さない言説であることもすぐれて非物語的存在といえよう。それは非物語が、意味ではなく語り得ないこと、「機械」では「私」それ自体を指向しているからにはかならない。「機械」の最終部、語りが「私」へと向かうことは示唆的であらう。

私は重クロム酸アンモニアの置き場を一番良く心得てゐたのである。私は酔ひの廻らぬまでは屋敷が明日からどこへいつてどんなことをするのか彼の自由になつてからの行動ばかりが氣になつてならなかつたのである。しかも彼を生かしておいて損をするのは軽部よりも私ではなかつたか。いや、もう私の頭もいつの間にか主人の頭のやうに早や塩化鉄に侵されて了つてゐるのではなからうか。私はもう私が分らなくなつて来た。私はただ近づいて来る機械の鋭い先尖がじりじり私を狙つてゐるのを感じるだけだ。誰かもう私に代つて私を審いてくれ。私が何をして来たかそんなことを私に聞いたつて私の知つてゐよう筈がないのだから。

「私」は疑いの矛先を軽部から「私」へと移していく。語り尽くさんでもするかのように、厳密に可能性をしらみつぶしにしていくなのである。「私」に「何をして来たか」と問うものはこれまでになかつたにもかかわらずこのように語られるのは、語り尽くそうとする指向性が「私」へと向けられるからにはかならない。そして他者を語り得ないことは既に論じてきたことだが、「私」はまた「私」をも語ることはできない。「私」とは語りの現在であり、語りの現在において現在を語ることは不可能だからだ。物語は常に、過去を語るることによつてしか成立しない。ここに至つて、「機械」の語りは一つの限界に達したと言つてよいだろう。意味を超えて飛躍することを夢想した「私」は、最後まで物語を成立させることなく思考する。語り得ないものに向かつて、言葉を尽くしたのである。非物語は、言葉をひたすらに尽くす以外に終わる術はない。繰り返すようだが、それは結論に達したからではない。饒舌で不要かに思われる「私」の疑いと迷いは、言葉を尽くすための必要な過程だったのである。

おわりに

非物語には意味が定着しないとすれば、「機械」は非物語である、^{二、三}と言うことはできない。より正確を期せば、非物語的な言説を非物語として名指すこと自体が語と矛盾をきたしている。むろん、そう書かなければ、書いてみなければ「機械」について論じることはいえないし、こうして矛盾を内に含みながら論を終わらせることは「機械」について思考を始めた時から決まっていたことなのである。それは偏に、「機械」が語りの不可能性を前に言葉を尽くしている小説であることに因っている。この原理的に語り得ないという事情を除けば、本稿が残した次の課題は二点に集約されると思われる。一、「機械」と同じ構造を有すると思われるテキストへと視野を広げること。二、横光利一の文学的思索の中に位置付けること。この二点である。本稿は「機械」の読解に徹しているため、「機械」を異なるテキストと関連させる余地を残しているからである。

語り得ないことについて語ろうとし、限界へと向かう思考であり続ける。さらに意味を超え、飛躍することを夢想するこうしたテキストが、「機械」として突然現れたとは考え難い。「機械」成立の背景に、他のテキストとの構造的同型性が認められる可能性が残されている。あるいは横光利一の諸作品との対照も有効になってくるだろう。新感覚派的とされている諸作品からの変化、新心理主義的とされている諸作との異同、「純粹小説論」に挙げられるそれ以後の作への展開など、「機械」とその構造を巡って論じていく可能性は無数に開かれているといえるだろう。

注

- (1) 小林秀雄「横光利一」(『文藝春秋』昭5・11)
- (2) 井上明芳「横光利一「機械」論―語ることの原理へ」(『國學院雑誌』平17・1)

- (3) 井上良雄「横光利一の転向」(『詩と散文』昭6・2)
- (4) 江後寛士「横光利一「機械」試論―心理のゲーム性について―」(『近代文学試論』昭42・6)
- (5) 芹澤光興「『機械』の構図」(『立教大学日本文学』昭53・7)
- (6) 神谷忠孝「勝ち負けの構造―「機械」―」(『横光利一論』双文社出版、昭53・7)
- (7) 宮口典之「『機械』論」(『名古屋近代文学研究』昭59・12)
- (8) 桂秀実「書く「機械」」(『探偵のクリティック―昭和文学の臨界 桂秀実評論集』思潮社、昭63・7)
- (9) 伊藤整「新興芸術派と新心理主義文学」(荒正人編『昭和文学研究』昭27・6)
- (10) 松村良「横光利一「機械」「寝園」―短編から長編へ―」(『日本近代文学』平元・10)
- (11) 沖野厚太郎「メタ小説・反探偵小説・「機械」」(『文芸と批評』平元・9)
- (12) 十重田裕一「『機械』の映画性」(『日本近代文学』平5・5)
- (13) 島村健司「『機械』と探偵小説の近接性―「私」の企図と読者への通路」(『蒼光』平12・3)
- (14) 松村良「『機械』―一人称の「私」」(『国文学 解釈と鑑賞』平12・6)
- (15) (2) に同じ
- (16) 島村健司「一人称複数形のレトリック―横光利一の「機械」は、なぜ「私」語りなのか―」(『横光利一研究』平20・3)
- (17) (16) に同じ
- (18) (13) に同じ
- (19) 本稿が語りの中に見出していく「他者性」とは、いわば出来事が「私」には予期されていなかったということが判断できる表現において質的に読み取られる他者の痕跡のことである。「私」以外の言葉を読み取ることでできない「機械」にあつて純粋な「私」ならざるもの、すなわち「他者」を見出すことは一見不可能である。しかし「機械」の言説がすべて「私」の制御下にあると読むこともまたできないのであつて、語りに混じていく他者性に注意を払いつつ読み解いていく必要がある。

(20) (2) に同じ

(21) (1) に同じ。小林は他者を肯定する「それもさうだ」というフレーズについて次のように述べている。

こゝで例へば、それもさうだと思つて、といふ言葉の意味がわからなければ全文は寢言である。それは次の様な次第なのだ。

「使つてゐたつてなくなるものは無くなるのだ。なければ見付かるまで自分で捜せば良いではないか」、これは詢に立派な理論である。だが軽部にしてみればたゞ「私」を怒らす目的で自然と口に出た意地の悪い感情の言葉に過ぎぬ。理論の意味は全然ない。これをそれもさうだと思つた「私」は愚鈍からさう思つたのぢやない。此言葉を純粋な理論として受けたのだ、理論として受けたのは「私」が理論家であつた爲でもない。理論家なら、相手の感情の言葉を理論だと思ふ筈はない。「私」といふ人物の無垢にとつては、世の中の約束に関する法則は示すが、純粋な自身の法則は全々示さない処の軽部の感情は全々意味をなさないのである。意味があるのは軽部がさう言つたといふ現実だけだ。

「現実」をそのままに受け入れる「私」の姿勢を小林は「無垢」と呼んでいる。この評は十分に定義されていない語彙が多く用いられており難解である。したがつてここで多くを語ることはできないが、少なくともこの引用部では「私」が軽部の言葉を「それもさうだ」と受け入れたことについて、軽部の発言を純粋な理論として、現実の一部として「私」が受け止めたことを指摘していることは示唆的である。

(22) ここでいう「物語」とは一般的な小説に見られるもので、起点と終点を持つ筋のことである。

(23) (1) に同じ。該当箇所は次の通り。

「機械」は世人の語彙にはない言葉で書かれた倫理書だ。本屋には売つてゐない作家心得だ。それは兎に角、この作品から倫理の匂ひをかゞぬ人は楽書を読むに如かぬ。事実この作から作家の心情を語る言葉を取りのけたらこれは仕様のない楽書だ。私は好まぬ乍ら大変危険な解析を行はう。

「作家心得」としての意味付けは明確になされているわけではなく解釈の余地は多く残されている。

※「機械」の引用は河出書房新社版『定本横光利一全集』第三巻に拠つた。なお、先行研究史および本論の引用に際して、全て仮名遣いはそのままとし、漢字のみ新漢字に改めた。

